

心のふるさと

七夕飾りは七種の品々で

多田 信作

◇日本人が作りあげた節供のまつり

明治三十八年（一九〇五年）菊地貴一郎著『江戸府内絵本風俗往来』をひもとくと「七夕祭——毎年七月七日は七夕祭とて、色紙ゆわいつけたる竹にほおずきをいくつか珠玉のようにつらねて結び、また色紙を切り、網状に作り、それで吹き流しにしたり、又、紙で作りたる硯、筆、つづみ、大鼓^{おおづみ}、算盤、更に大福団、又、西瓜の切り形などをくりつけ屋上に高く立てているようである。そのあと夕方が翌朝には一本残らず取りはらい、川か海に流す」などと記されている。又文政十三年（一八三〇年）喜多村信節著『嬉遊笑覧』にも「短冊に短歌や和歌などを記し、併せていろいろのものもつるす」などと表記されて

いる。広重の『名所江戸百景』にも七夕祭浮世絵をとおして、江戸後期の七夕竹飾りがどんなものであつたかが推察される。

唯これらの文献、資料をとおしてみると、おもしろいことに、七夕飾りは、七種の品々が主要であつたようである。

①吹き流し：機織姫、織女星のドラマであるから、糸を形どり飾りとする。

②折鶴：自家の一番年長者の年の数だけ折り長生きを祈る。

③短冊：願いごとを必ず墨で書き、自分の願いときれいな字そのものを奉納した。



▲ 江戸末期、錦絵の中の七夕飾り

丁寧にみて下さると、飾りものに、大変特徴があります。

作大漁を祈った。

⑤屑筆：飾りを作るときにでた紙屑を入れて吊るし、物の始末をきちんと教えた。

⑥着物：自分の身を守ってくれる着物に感謝し、併せて裁縫が上手になることを祈る。

⑦巾着：お金と蓄え、無駄遣いを慎むよう

など七つの願いと考えを飾りに託した先達の表現形式は今日でも息づいている。このような形式^{スタイル}はいつ頃から発生し定着したかは定かではない。

唯五節供のうちの七夕節供は、もともと故事とされる牽牛・織女の二星の恋物語を中心^に展開され、それらが万葉集の中でも、声高く七夕歌としてよみあげられているが、更に古文書をひもとくと『続日本紀』和銅三年（六九一年）など史実には七月節供は相撲節供であつたという事実にでくわす。相撲節供の折、詩宴がくりひろげられ、その中で恋物語が詠われたのではないかと推察される。

◇七夕飾り七点の様式について

「飾り竹」江戸時代から明治にかけて、七夕祭のための竹売り、笛竹売りが巷を行商してあるき、大きなものでは特大の孟宗竹なども大八車に積んで、売り声とともににぎわしたらしい。しかし、古い文献をみても、何故竹や笛なのが定かではないのが残念である。「竹飾りの短冊」色紙の短冊に詩歌や願いごとなどを記すことも今日も変わらないが、こ

の短冊に記すとき、必ず芋の葉の露をとり集め硯に入れ、墨をすることは、最近ではすたれてしまつたようである。

「竹飾りの吹き流し」これは願い糸の変身とよむと解りやすい。機織姫織女星の話なので糸を形どり、飾りものとするが、昔は和紙を草木染で彩色したものを利用し、美しい織物を連想させたとのことである。

「竹飾りの着物」これも願いを込めて作りあげる糸（吹き流し）と同様、着物づくりをして、裁縫並びに手芸技法などの上達を願いを込めて作りあげたようである。だから、和紙に草木染で彩色し、実物大の着物を作りあげたりした時代や、地方もあつたことである。これが今日でも形を変え残っているのが信州松本地方や福島白河などである。

「竹飾りの折鶴」延命長寿を願う千羽鶴や更に万羽鶴が登場するようになつたが、基本は前述したように、自家で一番年長者の年の数だけ折り長生きを祈つた。しかし、年の数だけより、十や二十以上折り長寿を祈る風習が生まれ、だんだんと千羽鶴化したようである。

この他、地方々々、それぞれの職業や生活の中から生まれたものが七種の中にとりこまれた。鯛をはじめ宝船、星、更に藁や菰の葉で牛、馬、人形なども作り飾つたようである。

これらを通して推察できることは日本では七夕祭に二面あり、我が国固有の織女信仰と

◇◇◇◇◇◇◇特集＜星・七夕＞◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

写真は四百年以上の歴史をもつ大東町（島根県出雲地方）のまつり
大東町の七夕まつりは子ども中心で、8月6日一日かけて
まつりを楽しめます。屋は七夕飾り、夕方から小学校校庭



に集まり、日没と同時に赤川（大きな河）にむかって行列
です。「テンテンテノン テンテコテンのたなばたさん」と
歌を大声で唱じ太鼓やお囃子にあわせてねり歩きます。

中国より渡ってきた牽牛星、織女星にまつわる伝説が融合して形成されたようである。
だから七夕とかきそれをしつせき、又はなぬかのよなどと読んでいた。そして「たなば
た」は棚機と記している文献が多い。

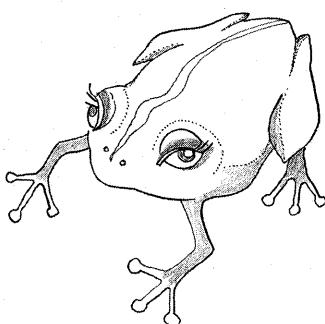
しかし七夕飾りは七種飾りが圧倒的である。

(芸術教育研究所・おもちゃ美術館長)

七夕

星のつらなり、人のつらなり

猿渡英理子



昨年の夏、インドネシアに旅をし、絹織物と島の人たちの生活にほんの少しですが触
ました。絹織物にはトカゲ、ワニ、花、歴史、物語など原始的な力強い模様が描かれてい